伊勢地方の神事芸能

――カミの表象と獅子舞――

櫻井治男

はじめに

伊勢の地では「古来氏社の祭礼に就いて、年始に宇ふをば神事と称して御頭を舞はしめ、夏期に行ふをば会式と称して賑はしたものである」[1]と述べられているように、新春の時期に行われる獅子舞いを「神事」（じんじ）、夏の祭りは「会式」（えしき）と呼ぶ習わしがあり、現在もこうした呼称がみられる（写真1）。引用は『宇治山田市史』であるが、同市は、明治二十二年の町村制の施行による「宇治山田町」が同三十九年に市制施行された行政名である。宇治、すなわち皇大神宮（内宮）の鎮座地と、豊受大神宮（外宮）鎮座の山田を中心とする地域で、両宮の鳥居前町として発展してきた。昭和三十年に伊勢市と改称、さらに近年は、「平成の大合併」により平成十七年十一月、度会郡二見町・小俣町・御薗村との合併が行われ、新しい「伊勢市」としてスタートした。それ故、本稿で伊勢地方という場合は、現在の伊勢市及びその周辺地域を指し、また旧来の呼称である山田、宇治、二見、小俣、御薗などと慣例的な呼称を用いることがあることを予めお断りしておきたい。

かつて筆者は、三重県内の祭り・行事の概要について、比較的広範囲に分布しているものとして、山神の祭、弓射行事、獅子舞行事、祇園・津島の祭（天王・祇園祭）、浅間行事、盆行事や雨乞行事等の機会に踊

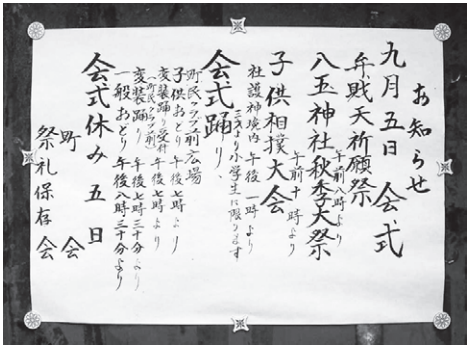

写真1　九月「会式」案内（伊勢市有滝町、平成16年8月26日撮影）

られるカンコ（鞨鼓）踊りが注目されることを述べた。[2] 現在の三重県は、行政上の観点から県域を五ないし六の生活圏として区分されるが、後者の場合、北勢・中勢・南勢（伊勢市・度会郡）・志摩（鳥羽市・志摩市）・東紀州・伊賀となっている。ただしこうした圏域も相互に重なる場合があり、民俗文化事象を大枠で捉えようとした場合は、風土性を踏まえると伊勢湾岸地域（含谷底平野）、志摩半島・熊野灘沿岸地域、伊賀盆地の三地域としてまとめることが可能であろうと考えられる。[3] もちろん同じ圏域内でも地域により民俗事象は区々ではある。

これらのうち、伊勢志摩・東紀州地域では、漁村・農村地帯で新春（正月～二月が多い）の儀礼として弓射行事や獅子舞行事がムラ行事として行われていることに特色がある。そこで、本稿では、獅子舞行事を取上げ、それがムラの神事である由縁を紹介し、神事芸能の内実を見ておきたいと思う。

一、三重県内の獅子舞行事

一般に獅子舞といえば、獅子頭を被って舞われる芸能のことを指すが、三重県内においても広くその分布がみられる。但し、地域的な精粗もあり、全県的な様相をうかがう上でまとまった情報としては、三重県教育委員会による(1)『三重県の民俗芸能』[4]、(2)『三重県の祭り・行事』[5] 及び県史編纂事業の一冊(3)『三重県史　別編　民俗』[6] がある。また、伊勢市については、『伊勢市史』[7] に個別の詳細な現状調査報告がなされている。筆者は、これらの編集・執筆に関わった経緯があり、またこれまでにもいくつかの事例報告を行ってきたので、[8] それらを資料として用いるにあたり(1)～(3)について簡単にふれておきたい。

三重県という範囲で比較的近時の獅子舞分布の様相を知る上では(1)(2)が参考となる。[9] (1)は、平成四・五両年度にわたる国庫補助事業「三重県民俗芸能緊急調査」の報告書で、長らく三重県内の民俗研究を牽引してきた堀田吉雄による「三重県の民俗芸能概説」、五十二件の「詳細報告」、県下の区・自治体の協力による予備調査に調査員が市町村教育委員会の協力を得て作成された「悉皆調査一覧」から構成されている。詳細報告のうち、獅子舞に関する事例としては、北勢で「北野町獅子舞」（四日市市）、「伊奈富神社の獅子神楽」（鈴鹿市）。中勢は「長竜神事」（勢和村）。南勢では「東大淀の御頭神事」（伊勢市）・「宮古の御頭神事」（度会郡玉城町）・「山神の獅子舞」（同）・「箕獅子舞」（二見町）・「切原の獅子舞・春田打ち」（南勢町）・「棚橋の御頭神事」（同）・「一之瀬獅子神楽」（度会町）、志摩の「ひっぽろ神事」（阿児町）・「坂崎の神祭」（磯部町）、伊賀では「敢国神社の

獅子舞」（上野市）の十三例が取上げられている。また、同書の「悉皆調査一覧」において「獅子」の登場を記す例（含む廃絶・休止）を数えると二六九例となる。詳細調査十三件の名称からもその一端が窺われるが、「獅子舞」「獅子神楽」と称する場合の他に、伊勢地方ではオカシラシンジ（御頭神事）と呼ばれているのが特徴である。

⑵の『三重県の祭り・行事』は、平成六年から八年にかけ、三十六名の調査員が分担してなされた全県調査の結果をまとめたものである。『三重県の民俗芸能』と同様の内容構成をとり、「三重県の祭り・行事概説」（櫻井執筆）、詳細調査報告一〇七件、「三重県の祭り・行事一覧」の三部からなり、調査当時、獅子舞に関わる行事で、現行実施とされているのは百余件である。

但し、ここに紹介した二冊の報告書は、各地域（自治会など）への質問票による回答に依拠しており、回答地域や回答者による精粗、記載漏れもあり、完全さを求めるのは難しいが、県内における分布傾向がうかがわれる情報源となっている。

教育委員会による二種の調査報告書と『三重県史・民俗』刊行との間には二十年弱の隔たりがあり、今日的には社会状況の変化、特に行事の担い手の高齢化と少子化による規模の縮小や休止といった場合もある。県史の編纂方針は、基本的に新たな調査を行わず、従前の自治体史（誌）をはじめ民俗調査報告、論文、諸記録を活用し執筆されているので、現状や行事内容の詳細を知るという点では性格を異にしている。但し、『県史』では、県内全般の当該行事の略概説とともに、鈴鹿地方、南勢地方、伊賀地方の獅子舞の特色を捉えた行事紹介がなされており、このこと自体が県内を見渡すと獅子舞について特徴を示す地域であると理解できよう。

表（後掲）は、『三重の民俗芸能』に掲載の一覧表より、「獅子舞」の語を含んでいたり、「獅子」について記述のある行事数を抽出したものである。北勢では、四日市、鈴鹿・亀山、中勢では松阪・勢和、南勢では伊勢、伊賀では名張・青山の各市町の数値が高くなっていることがわかる。行政範囲の広狭にもよるが、これらの地域に多いのはそれぞれの獅子舞行事の歴史的経緯にも関わるところである。

こうした分布状況などを見渡し、獅子舞行事の行われ方や芸能面での特徴を捉えて、県内における獅子舞の系譜分類を試みたのは堀田吉雄で、獅子舞の系譜を⑴「稲生系」、⑵「代神楽系」、⑶「御頭神事」、⑷「敢国神社の獅子神楽」、⑸「その他」と五分類している。[10] ⑴は鈴鹿市の伊奈富神社の獅子舞を中心に周辺一帯に見られるもの、⑵は「伊勢太神楽」として知られる桑名市大夫町の獅子舞系統

及び四日市の阿倉川系統の獅子舞である。(3)は宮川流域のもので、(4)は上野市（現、伊賀市）の敢国神社を中心とした獅子舞となっている。但し、県内の獅子舞を分類する定まった捉え方はないと指摘されていることも事実である。(11)

筆者は(1)「伊勢大神楽」系、(2)「神楽獅子舞」系、(3)「御頭神事」系として仮説的に区分している。その指標は、獅子舞の行われる機会や舞いを行う人々の組織状況に視点を置いたもので、(1)の場合は、桑名市大夫町に獅子舞（重要無形民俗文化財）のプロ集団が複数あり、その一行が全国を対象として比較的広範囲（近畿・中国地方が多いとされる）を巡舞する形がとられてきた。(2)は、特定の神社を拠点とする獅子舞集団が当該神社及び周辺域を巡舞する形で、鈴鹿市の例では伊奈富神社（県指定）・久々志弥神社・酒井神社・椿大神神社（県指定）、また伊賀の敢国神社の獅子舞

表

圏域（集計）	市町村名（平成の合併以前）	獅子舞件数（廃絶・休止を含む）（269 件）
北勢（85）	桑名市	1
	多度町	0
	長島町	1
	木曽崎町	2
	北勢町	2
	員弁町	1
	大安町	0
	東員町	1
	藤原町	1
	四日市市	40
	菰野町	0
	楠町	1
	朝日町	0
	川越町	0
	亀山市	5
	鈴鹿市	29
	関町	1
中勢（63）	津市	5
	河芸町	1
	芸濃町	2
	美里町	0
	安濃町	0
	久居市	1
	香良洲町	1
	一志町	3
	白山町	1
	嬉野町	2
	美杉村	2
	三雲町	5
	松阪市	20
	飯南町	1
	飯高町	2
	多気町	3
	明和町	4
	大台町	2
	勢和村	8
	宮川村	0
南勢（37）	伊勢市	16
	玉城町	5
	二見町	1
	小俣町	3
	大宮町	1
	南勢町	4
	南島町	3
	紀勢町	0
	度会町	3
	御薗村	1
	大内山村	0
志摩（16）	鳥羽市	5
	浜島町	0
	大王町	0
	志摩町	0
	阿児町	6
	磯部町	5
伊賀（52）	上野市	9
	名張市	27
	伊賀町	1
	阿山町	0
	島ヶ原村	1
	大山田村	3
	青山町	11
東紀州（16）	尾鷲市	5
	紀伊長島町	2
	海山町	2
	熊野市	5
	御浜町	1
	紀宝町	1
	紀和町	0
	鵜殿村	0

（県指定）がそれに相当する。巡舞の範囲は当該地域を大きく越えるものではないが、例えば敢国神社のそれは旧伊賀国一円を回ったとされ、これは伊賀地方が地勢的及び古くからの行政的に一まとまりとなっていた要因とともに、敢国神社が伊賀国一宮として崇敬が寄せられ、近世は藤堂藩の庇護を受けて来たことと関係していよう。ちなみに、旧伊賀国内でも名張市（近世は名張藤堂藩であった）の獅子舞実施件数が多いのは、敢国神社の獅子舞を学んでムラごとで舞うようになったと伝えられており、秋祭りや神社の造替遷宮（当該地方ではゾウクと称される）などの機会に獅子舞が祭礼行列の先導役を務めるなど、祭りに獅子舞が伴われていると見なされている状況と関係しよう。

これらに対して(3)のタイプは、オカシラ（御頭）と呼ばれる獅子頭を御神体として祀るとともに、獅子舞も行われるが、オカシラを用いてムラの神事がとり行われるという特徴がみられる。獅子頭は舞の道具としての役割以上に、ムラの神とも見なされる象徴的な存在であり、その取扱いはかなり厳重で、祭りの日にのみ人々の前へ姿を現すという特徴をもっている。伊勢市の西方を流れる宮川下流域の御頭神事の調査研究を行った堀田吉雄は、内容が複雑多岐となっているこの行事を四系統に分類しそれぞれの特徴を指摘している。すなわち(1)「山田のウブスナ七社の系統」で「タイマツやツムギなど火祭を盛大にする」、(2)「（仮の名称として）宮古系」で「呪術的要素が濃厚」、(3)「有滝系」で「頭受けの仕方に特色」、(4)「村松系」で「夜の打ち祭りに特色」がある。[12] 分類の基準が何に置かれているのかなど検討課題はあるが当該地方における行事の特徴を捉える試みとなっている。

そこで以下には、この御頭神事について、オカシラへの人々の接し方と、神事の構成内容を中心に取上げ、神事芸能の所以を述べることとしたい。

二、カミとしての獅子頭

現在、オカシラへの当該地域の人々の接し方も、以前に比べるとゆるやかになってきたことがうかがわれる。昭和四十年代後半～五十年代初めに、筆者が伊勢志摩地方の御頭神事を調査していた頃はムラ人の緊張した対応にふれることがしばしばであった。例えば伊勢市村松町の神事（市無形民俗文化財）では、各戸回りをする獅子舞いの一行が町内の道路を廻る時、人々はオカシラと直面することは避け、道の脇へ身を隠したり、「オカシラガがやってくる」といって、出合わないように子供たちに注意を呼び掛けるのが印象的であった。また、国の重要無形民俗文化財として、「御頭神事」という地元の呼称で指定された伊勢市御

写真２　獅子神楽の「長持」（名張市瀬古口、平成 15 年 10 月 25 日撮影）

薗町高向では、オカシラの写真を撮影したり、まつられている部屋へ女性が入ることは避けるべき行為となっていた。こうした状況は、すでに堀田吉雄の報告にも記されているところである。[13] 今日、オカシラに対する神聖意識が失われたわけではないが、写真撮影が盛んに行われ、道路を通行する車を避けるように獅子舞いの一行が巡回することも、普通の光景となって来ている。

そこで、まずはオカシラの奉斎とオカシラの取り扱い方という点を中心にみておきたい。

オカシラの奉斎

伊勢太神楽や神楽獅子舞系のように、各地を順舞する例では、獅子頭とその衣裳、楽曲演奏用の笛・太鼓やチャンギリと呼ばれる摺鉦（すりがね）、さらに「伊勢大神楽　某大夫」などと印刷した「お札」などが長持や櫃の中に納められている。長持は二人が担いで運搬できるようになっている。今日では自動車に乗せて運ばれることがほとんどで、舞いを行う場所に到着すると獅子頭が箱から取り出されるが、それは小さな屋形に納められてもいる（写真2）。獅子頭は、単なる物品ではなく丁寧な取扱いが見られるが、長持におさまって持ち運びされるという点では、舞いを行う上での神具的な側面が強い。

しかしながらオカシラの場合、多くは神社や寺に保管されているのが通例である。しかも、神社の本殿、あるいは境内の小祠やムラの公共施設の特別室というように「ご神体」の扱いで、保管というよりも奉斎されていると見なすのが適切であろう。伊勢市村松町では「御頭神社」がムラ氏神とは異なる場に建立されており、御薗町高向の場合、会所と呼ばれるムラ運営の施設内神庫に納められ（写真3）、区長が鍵を預かる慣例となっている。

獅子頭が文化財指定を受けている場合もあり、かつてはそれを用いていたが、実際に舞いを行う時は、破損や傷みを避け、新たに作った獅子頭を使用し伝来のものは飾り置かれることも多い。昭和五十年代のはじめに筆者が調査した伊勢市中須町では、激しい舞いにより（オカシラが火をつけた藁を咥える場面があり大きな盛り上がり場面となるが）、神

事終了後の引き継ぎ時に、少し痛んだオカシラを奉斎場所へ納めるにあたり関係者が補修のことで慎重な協議を重ねる場面に出会ったことがある。次年度当番にとり、オカシラが痛んだままで引き継ぎことはできず、さりとて当年度の当番側にとっては神事が終了するとできるだけ早く元の場所に奉斎する慣例遵守からくる措置問題で、オカシラは一旦納めると次回の神事日まで人前には出さないという「ご神体」であるがゆえの課題である。

奉斎場所について、江戸時代末に山田地域の社祠等を記録した『小祠拾』[14]によれば、坂社（伊勢市八日市場町）について「宝殿ノ下ニ扉一口アリ。御頭ヲ納。殿内ニ御頭ノ古物ト云ヘル物アリ。」とあり、また箕曲社（岩淵町・箕曲中松原神社）では、「宝殿ノ下ニ扉アル事坂社ノ如シ。御頭ハ常ニハ宮崎文庫ニ預ケ置テ、正月十五日ノ夜宝殿ノ下ニ納メ、翌十六日出レ之神事ノ舞曲アリ」とみえ、本殿の下に扉付きの御頭を納める場所が設けられていたことからも、その重要度がうかがわれよう。

写真３　会所の神庫とオカシラ（伊勢市御薗町高向、平成 22 年２月 13 日撮影）

また、度会郡南伊勢町の旧一之瀬郷の四地区（度会町市場・脇出・和井野・南中村）で行われる「一之瀬獅子神楽」（県指定）では、明治末期の神社合併で、それまで各ムラの神社に祀られていたオカシラが、合併の中心神社である一之瀬神社にまとめて奉斎されるようになった。獅子舞の行われる日（一之瀬神社例祭）の前日にオカシラが四地区に渡され、各区の宿（特定の個人宅から公民館へ移っている）で「宵神事」（宵宮とも）が行われ、ホンビ（本日）の舞いが終わると再び神社本殿へ納められるという形態がとられている[15]。

オカシラがもともと神社で奉斎される対象であったとは必ずしもいえない。伊勢市の山田地区には、古くから産土八社のオカシラと呼ばれる存在があり（大社〈須原大社〉・藤社・茜社・坂社・今社・牛頭社〈上社〉・箕曲社及び落獅子）、正月十五日前後に日を違えて御頭神事が行われてきた。茜社の獅子頭（県指定文化財）には、永禄二年（一五五九）の銘があり、室町時代には各産土で獅子舞が行われていたとされているが[16]、江戸時代の記録をみると、落獅子（『小祠拾』には他領より移住者の「産土神」とする）の場合は、真言

修験派の十王堂宝蔵院に置かれていたとあり、また今社のそれは「子良館」（外宮・大物忌の居館）に常に置かれていた。[17] 前述の中須町では町内の堂にあったが、明治以降に津島社で奉祀されることになったという。

寺院から神社への奉斎場所の変更には、神仏分離の影響があるが、伊勢市の西隣の玉城町山神（県指定「獅子舞」）や同町宮古（県指定民俗資料「宮古の石風呂」、獅子舞の舞い手の潔斎所）の寺院には、オカシラを奉斎する施設が構えられている。ただし、獅子頭がホトケと称されることはなく、カミと呼ばれることは共通している。宮古のオカシラ奉斎伝承では、明治末期の神社合併の節に、「ご神体」が他村へ遷されることを避けて独自の設備を整えたとされる。

前述した旧一之瀬郷のように、明治末期の神社整理の影響を受けた奉斎方法の変更は種々みられるが、伊勢市西豊浜町では、上・森・小川の三区で行われる神事でのオカシラは各地区で奉斎され、合併の中心である森地区の神社へ集約されてはいない。この内、森地区では、合併先の上地区に鎮座する豊玉神社の「神遷」（造替）ごとに本殿を受け、遥拝所とする慣例があり、両地区ともにオカシラの奉斎施設が二十年に一度の式年造替に預かるという状況となっている。

以上のように、近代以降でもオカシラ奉斎の方法や場所は少なからず変化を生じているが、ムラの神として祀られている点では連続していると見られよう。

オカシラの取り扱い

ここでは、人々がオカシラに直接触れる場面での様相をうかがいつつ獅子頭に関わる聖性面について述べることとする。オカシラへの接し方としては、禁忌をともなう消極的な態度と、積極的なそれとが見られるが、前者の態度の方が多い。まずオカシラを直接触れることができるのは、舞い手（前後の二人）と神楽衆（「神楽師」「杉大夫」とも呼ばれる）、管理責任を負う限られた人々が基本である。また子供がいたずらで触ることはほとんど咎められないが、一般のムラ人は触れることはせず、特に成人女性はオカシラを安置する場所（厳格な所では注連縄で区切られていたりする）へ入らない等禁制事項ともなっていた。ただし、オカシラの衣裳（胴幕・油単）の繕いは老齢の女性がしていたというところもある。総じて、このような禁忌習俗は衰退していることも事実である。

オカシラの舞い手や神事当番は、あらかじめ伊勢市二見町の夫婦岩周辺の海岸や付近の河川で潔斎したり、食事において肉類を避けるなど、一般に見られる祭り行事の様子とは変わらず、神楽衆へも同様の禁制が科せられていたこ

ともある。奉斎されているオカシラが取り出され舞い手へ渡されるまでは区長や当番役などがそれを扱うが、その場合には白紙を手にして触れたり、息が直接かからないよう口に半紙を咥えるなどの作法がとられる。

積極的な行為としては、舞いの見物者が、何番かの舞いの途中で、榊の枝（白紙で包んだ硬貨が添えられている）でオカシラを叩いたり（旧一之瀬郷・写真4・5・6）、口を開けたオカシラに供物を差し入れる時に見られる程度で、むしろオカシラの方から人々へ仕掛ける。例えば子供や高齢者・女性の頭を噛んだりするのが一般的である。三重県南部の尾鷲市には獅子神楽系の獅子舞神楽が三か所（矢ノ浜、北浦、天満）で伝承されているが、そこでは「獅子を囃したてる」として、色の布切れを結わえた竹の小枝で、主に子供たちが獅子を叩くこともなされるが（写真7）、こうした子供の様子はオカシラ神事では見られない。

むしろ、オカシラへ積極的に手出しや干渉をするのは、舞いの場面の一シーンとして登場するクットリ（口取り）、ハナタカ（鼻高）、テング（天狗）、サルタヒコ（猿田彦）などと呼ばれる道化的な性格をもつ役の者となっている。

なお、三重県尾鷲市の尾鷲神社祭礼（通称「ヤーヤ祭」二月一日～五日）では最終日にオシシが登場するが、舞いはまったくなく、白衣姿の神職が獅子頭を被り氏子の前に姿

写真４　獅子頭の鼻を白紙で持ち、口中にお供えを入れる人々（度会郡度会町、一之瀬神社にて、平成25年2月11日撮影）

写真５　神社に到着し獅子が姿勢を整える。獅子頭を納める箱は右肩で担がれる。（一之瀬神社にて、平成25年2月11日撮影）

写真６　一之瀬神社での座礼。この時、農作の占いが大根を用いて行われる。（平成25年2月11日撮影）

写真９　オカシラを高くかざしながら練る若者（勢市高向、平成 20 年２月 11 日撮影）

写真７　子供たちが獅子の頭を叩きながら囃したてる（尾鷲市の矢ノ浜神楽、平成 27 年２月５日撮影）

写真 10　化粧の施されたオカシラ（伊勢市西豊浜町森地区、平成 25 年２月 11 日撮影）

写真８　白衣の神職が獅子頭を被る（尾鷲市の尾鷲神社、平成 15 年２月５日撮影）

を現すことが祭礼全体のなかで重要な場面となっているように、神事としての性格が強く出ている[18]（写真８）。また、後述の伊勢市御薗村高向の「御頭神事」では定まった年齢（二三・二六歳）の青年が最初にオカシラを手にし高く掲げて振ることが定まっているように（写真９）、一般に特定の者以外に触らせないという制限が課せられている。

オカシラの飾り付けや舞いの中休み、神事の終りにおけるオカシラの扱いについてふれておきたい。通例は専用に作られた箱や用途に充てられた櫃に納まるオカシラが取り出されると、和紙を巻いて作られた新しい髪の毛を頭部に付けたり、少なくなっている場合は付加される。髪は舞いの途中で失われたりするが、お守りや災厄よけとして紙片を持ちかえることも多いので減じる場合がある。

伊勢市西豊浜町森では、舞人がオカシラを酒で清め、顔全体を白粉で塗りつぶし、口紅をほどこし、髪の毛を付けくわえ、半紙に敷いた鏡餅一重ねを口に咥えさせることで飾りつけは終了する（写真10）。終了後は酒ですべ

て洗い落とし櫃に納められる。このような例は、他に見かけないが、神聖性が強調された姿といえよう。餅を咥えさせる例は山田地区のオカシラでは一般的である。南伊勢町切原ではオカシラの前にユリ（曲の容器）へ入れた供物が置かれ、燈明がともされる（写真11）。オカシラに化粧をほどこすことについては、山田地区の今社について次のような興味深い記述がある。[19]

○今社御頭化粧の事

毎年正月十四日、神楽職の老女、今ノ社の御棚ノ家にて御頭の化粧又鉄漿ツケと云式をすることあり、其式ハ老女下宿ハ曾根町の長尾氏なり、此処にて饗飯あり、飯後沐浴して告知の使の来るをまつ、さて御棚の人御頭を子良館御頭常ハ子良館に預け置けりより請取来て御棚の家に安き、即刻長尾氏へ告知す、それより老女御棚家へ至り御頭ノ箱の前にて祓を修す祓具ハ御幣・銭切・参枚なり、申す所ハ一切成就の祓ノ詞也　此祓の式を俗に化粧とも鉄漿附とも云なり、祓終て後、御頭を箱より出し、恭しく安置し、さて節餅等を供へまつるなり、又神事終て御頭を納むるをりも、下宿曾根町長尾氏にて饗飯沐浴あり、告知に従ひて御棚家は到り、御頭の前にて修祓前式の如し、右祓して後、御頭を箱に納むるなり、此行事何を始めともしれず、古くより勤め来しか、天保五年より吾職の老女参りて勤る事ハ廃絶て、御棚の人是ノ式を行ふこと、なれり

写真11　飾り付けの終わったオカシラ
（度会郡南伊勢町切原、平成15年1月12日撮影）

この記事によれば直接オカシラに化粧は施されていないようであるが、担当者が老女であり、身を清めてから、彼女が祓を修する行為が「化粧」「鉄漿ツケ」とも称されている。森地区の神事で行われている白粉と口紅での化粧との類同性がうかがわれるが、両者ともにオカシラを箱より取り出し、その飾り付けの一連の過程がカミをまつる行為と見なすことが可能であろう。

また、舞いの中休みの時やオカシラとともに町内を移動する場合には、必ず左肩に担うという点は共通している。神事の終了後にはムラ境へ行き、災厄をムラの外へ遣る儀

礼（注連縄を切る）や使用された道具類を処理する（御幣を挟んだ竹を切るなど）行為が伴われているが（注24参照）、それが済むと「跡見ず」と称して、オカシラをその衣裳で包み込み、他者に見られないように急ぎムラ内へもどることがなされる（伊勢市高向）。

以上、個別事例をみると多様であるが、オカシラへの人々の態度をみることにより、カミとしての性格が意識されている一端が理解されよう。

三、神事芸能としての御頭神事

獅子舞の構成

御頭神事での獅子舞構成は「七起しの舞」とされ、オカシラを大蛇と見なし、須佐之男命が八岐大蛇を退治するシーンを再演すると説明されている。こうした説明がいつ頃からなされているか未詳であるが、伊勢市磯町では次のように解説がある。[20]

序章……中門入り、地の一、二、三

初段（おこし）……八岐大蛇が生贄の櫛名田姫を探して歩き回る。

二段（にのこうじ）……須佐之男命の計略により、用意された酒樽に櫛名田姫の姿が映り大蛇が喜びを示す。

三段（りんかん）……大蛇が八つの酒樽に、八つの頭を突っ込み、酒を飲む。

四段（きりひょうし）…大蛇が酒に酔って暴れまわる。

五段（とりまとめ）……大蛇が泥酔し、眠ってしまった隙に退治し、大蛇の尻尾から剣「天叢雲剣（後の草薙剣）」が出現する。

六段（神上げ）……須佐之男命が大蛇を退治し、神剣を得て神に拝謝。

七段（結びの舞）……悪霊（大蛇）を追い払い、神となって天上し日本を納める。

この舞いでは、出雲神楽・石見神楽などに見られるような須佐之男命・櫛名田姫・八岐大蛇がそれぞれに扮装して登場するわけではない。オカシラ一頭が大蛇となってこうした光景を舞いで示しているとされるところで、例えば大蛇が泥酔して眠る場面は、地面に敷かれた新藁の上に長く寝そべり、時折、口を開閉するというものである（写真12）。オカシラ以外に登場するのは、子供が役目を務めるクットリと称さる、天狗面（鼻高面・猿田彦面）を付けた存在で、そのクットリが寝ているオカシラの頭を叩いて起こしたり、時にはからかう所作が見られる。

御頭神事の芸能面としては、獅子舞自体に芸能的特色が見られるわけであるが、南伊勢町切原では、神事の日に「春田打ち」行事が伴われている。[21] また伊勢市西豊浜町森では、舞いの「神上げ」（磯町の例では六段目）のとき、オカシラの尾と頭の舞い手二名が、それぞれススハライ（短い竹に藁を折り曲げて結わえたもの）とエブリをもち、代田掻きの所作をする場面がある。伊勢地方では珍しい事例といえよう。また、度会町棚橋では、寝そべっているオカシラの上に天狗がまたがり、見物人と軽妙なやりとりをするウマと呼ばれる行事がある。馬に見立てたオカシラに見物人が難癖などをつけ、天狗がアドリブで即答する内容で、ムラ人にとり楽しみの場面である。

写真 12　眠りについたオカシラ（伊勢市御薗村高向、平成 22 年 2 月 13 日撮影）

祭礼としての神事

既述のように、御頭神事は、単にジンジと呼ばれるように、それが行われる地区では年に一度の大きな祭礼になっている。昭和五十二年二月のことであるが、度会町上久具の某家では不幸事があり、神事の三日間を避けて葬儀を行うこととなったと述べられたことがある。ムラの祭りという性格がうかがわれる事例といえよう。

伊勢市の山田地区でかつて行われていた御頭神事の様子が、現在もうかがわれるのは御薗町高向の御頭神事である。高向のそれはこれまで各種の報告書があり、また映像による記録保存も幾度か実施されてきた。映像記録として詳細なものは、文化庁の平成二十二年度の「ふるさと文化再興事業　地域伝統文化伝承事業」により制作された「重要無形民俗文化財伊勢市御薗町高向御頭神事」がある。また、ムラの神事当番である当屋（「トヤ」と称す）の立場で記された一年間の記録[22]があり、当屋が神事斎行の決定権を有するなどまさに「神事」として行われていることを知ることができる。

高向の神事についてオカシラの動きを中心に概略を簡単に紹介すると、神庫から出された二頭のオカシラは「杉大夫」と呼ばれる獅子舞役の手に渡される。昼の間（日中）

は、神社・ムラの辻・当屋宅などで舞いが行われるとともに、道中の家々を訪れ、ククメモンと呼ばれる供物（金員）を受け取るとともに、玄関先で獅子頭を勢いよく前後に三度振り動かす。オカシラ二頭は、かつて村内に「大社」と「上社（鏑社）」があり、それぞれに神事が行われ、氏子も分かれていたが、明治末期の神社合祀により一神社となった結果、現在では明確な氏子区分は見られない。二頭の家回りが終了すると昼の行事は終了となる。

夜に入るとオカシラの衣裳が付け替えられ、「共盛団」（青年団）がオカシラを手にしてそれを頭上高く上げて振りまわしながら、[23]ツムギ（積木）という篝火が焚かれているムラの広場まで練り歩き、ツムギを三周して行事が終了となる。その後、オカシラは、杉大夫の手によって、人に知られないようにムラ境（注連切り場）へ赴き、そこに張られた注連縄を切って、急いで会所へ戻り納められることとなる。これにより神事が滞りなく終ったこととなり、会所のメンバー（区長等）と青年団とが手打ちをして解散となる。

このような、昼と夜の行事構成から成り立っている様相は、かつて山田地区の産土社の御頭神事を彷彿するものといえる。オカシラが各家を回り（省略された場合もあるが）、さらにムラ境まで行くことは高向だけではなく近隣のムラをはじめ、松阪市や度会町の獅子行事[24]でも見られるところであるが、その行為については「厄をオカシラが持って行く」と説明されるところで、新春の除災儀礼と見ることができよう。そこには、カミであるオカシラの聖性とそれに伴う力への期待があるといえる。

おわりに

以上、伊勢地方の御頭神事と称される行事について述べて来た。獅子舞が行われるところから舞いに焦点があてられるところでもあるが、この行事の全体像をうかがうと、地域社会の神事儀礼が基本となっており、そこに芸能的な舞いが舞い手により演ぜられると見られよう。こうした点から類推すると、「七起こしの舞」も神話に見られる八俣大蛇と須佐之男命の闘争という物語での理解とは別に、オカシラが眠り、再び勢いよく立ちあがり激しく動くさまは、新春における「死と再生」の象徴的なパフォーマンス[25]と解釈することも可能であろうし、伊勢市高向のように、若者がオカシラを手にする姿に新たな年の出発への力強さを期待するムラの意識を示しているといえよう。大方のご叱正を乞う次第である。

注

（1）『宇治山田市史』（宇治山田市役所編集・発行、昭和四年三月）、一四五六頁。

（2）拙稿「三重県の祭り・行事概要」（『三重の祭り・行事』三重県教育委員会、平成九年三月）、二一～三五頁。

（3）『三重県史　別編　民俗』（三重県、平成二四年三月）、八頁。

（4）『三重県の民俗芸能』（三重県教育委員会、平成六年三月）。

（5）注（2）参照。

（6）『三重県史　別編　民俗』第5章　祭り・行事と芸能三　獅子舞行事（石原佳樹・山口浩司・八幡崇経執筆）

（7）久志本まどか「御頭神事」（『伊勢市史　第8巻　民俗』第三章第二節「祭りと民俗芸能」、伊勢市、平成二一年八月）、三六八～四二〇頁。

（8）調査報告として「松阪地方の獅子頭行事―特に美濃田町の事例を中心に―」（『皇學館大学神道研究所所報』第一七号、昭和五三年三月、一～六頁）、『三重県の民俗芸能』所収拙稿「長龍神事」（多気郡勢和村片野区、一〇九～一一二頁）、「切原の獅子舞・春田打ち」（度会郡南勢町切原、一四四～一四九頁）、「棚橋の御頭神事」（度会郡度会町棚橋、一六〇～一六四）。「一之瀬獅子神楽」（『平成一六年度ふるさと文化再興事業三重県の民俗行事報告書1』（平成一七年三月、三重県教育委員会、一一～二七頁）など。

（9）県内の分布についての先行報告として倉田正邦「三重県の獅子舞分布一覧」（『伊勢民俗』第一巻三号〈伊勢太神楽特集〉、昭和二八年二月、『伊勢民俗　復興合冊』二〇〇二年九月）があり、七七件（含宇治山田市の六件）が掲出されている。

（10）堀田吉雄「三重県の民俗芸能概説」（『三重県の民俗芸能』、一二頁）。

（11）前掲『三重県史』、五〇七頁。

（12）堀田吉雄『頭屋祭祀の研究』（光出版、昭和六二年三月）、一三四～一三六頁。

（13）堀田前掲書に「高向では神庫から祭の日にうやうやしく御頭を出すと、必ず不審番をつける習わしである。棚橋（度会郡度会町・・注櫻井）ではフルドウサン（古い御頭）は、写真も撮らせなかった」（一三二頁）とある。

（14）『小祠拾』（杉木吉昵著、文政五年序・一八二二、西川順土校注『神道大系　神社編　伊賀・伊勢・志摩』昭和五四年所収）、四八五・四九四頁。

（15）拙著『蘇るムラの神々』（大明堂、平成四年四月）、二〇五～二〇八頁。

（16）注（7）久志本報告、三六九頁。

（17）井坂徳辰編『庭燎雑纂』（増補大神宮叢書23　神宮近世奉賽拾要前編）（吉川弘文館、平成二七年三月）、八一〇頁。

（18）櫻井治男・八幡崇経「近世尾鷲『大宝天王社』正月祭礼の構成と特質―現尾鷲市の『ヤーヤー祭』調査に関連して―」（『皇學館大学神道研究所紀要』第八輯、平成四年三月）、四一～一二八頁。

（19）前出『庭燎雑纂』、八一〇～八一一頁。

（20）『伊勢市史　第8巻　民俗』、三七三頁。

(21) 注（8）「切原の獅子舞・春田打ち」参照。

(22) 曽野洋『御頭神事奉祭次第記』（文化印刷、昭和五六年）

(23) 獅子頭を頭上に掲げ天地四方をさす行為を鈴鹿地方では「かいなざし」と称されるが、これは「腕（かいな）差し」の意味ではないかとの指摘がある（櫻井勝之進「鈴鹿山麓の村堂」『社会と伝承』二巻二号、昭和三三年四月）。

(24) 松阪市朝田町「よいよい神事」・早馬瀬町「ヨイヨイ神事」ではムラはずれに御幣を付けた竹を立て、美濃田町「ススキコカシ」は祭具をムラ境から外へ捨て、岩内町「どこんのり」は最後に集落外のギッチョバ（獅子塚）を訪れる。度会郡度会町棚橋ではイモと称する柳製の独楽状のものを所定の場に、同郡玉城町宮古では隣村の社にギッチョバイと呼ぶ作り物を納める慣例がある。これらの詳細は、『松阪市史第十巻　資料編　民俗』（蒼人社、昭和五六年）、『度会町史』（同町、昭和五六年三月）、前出拙稿「松阪地方の獅子頭行事―特に美濃田町の事例を中心に―」参照。

(25) 拙稿 "The Symbolism of the Shishi Performance as a Community Ritual: The Okashira Shinji in Ise." *Japanese Journal of Religious Studies* 15 (2-3): 137-53 (1988) 参照。

（皇學館大学特任教授）